サンスクリット語文法ノート (12)

√pā「飲む」の使役相 pāyáyati について

松浦　高志

1　pā-「飲む」の語根と延長要素

√pā「飲む」は，(1) 印欧祖語では喉音で終わる語根であること，また (2) 延長要素 -i- を用いる場合があることが特徴である．また（√pā「飲む」に限らず）一般に，(3)「喉音＋延長要素」は，転置されて「延長要素＋喉音」になることがあるため，√pā「飲む」の活用形等は予想できない形になることがある．(3) は喉音転置（laryngeal metathesis）と呼ばれる[1].

2　長母音語根の使役相と √pā「飲む」の使役相

さて，√dhā「置き定める」のように長母音で終わる語根の使役相（causative）は，ふつう p を挿入して dhā*p*áyati になると学ぶ（*VGS* §168.1.d [p. 196]）．しかし √pā「飲む」は例外で，y を挿入して pā*y*áyati になると説明される（*VGS* §168 の ‘Irreguralities’ の d [p. 198]）.

これは，上の (1–2) を用いると簡単に説明できる．まず √pā「飲む」の語根は印欧祖語では *peh₃- と再構築され，使役相では o 階梯になる[2]．次に，（ある活用形で延長要素 -i- を用いるかどうかは一般には予想できないが，とにかく）√pā「飲む」の使役相では延長要素 -i- を用いるのでこれが

[1] 松浦「延長要素 -i-」77–78.

[2] Gotō, *Morphology*, 128.

語根の直後に付く．さらに使役相をつくる接辞 *-éi̯e- が付くと，直説法 3 人称単数では次のような形になる．

*poh₃-i̯-éi̯e-ti > *pō-i̯-éi̯e-ti > pā-y-áya-ti.

喉音 *h₃ は子音（共鳴音）*i̯ /j/ の前かつ母音の後にあるので脱落し，前の母音 *o が延長されて *ō になる（代償延長）ので，サンスクリット語では pā- になる．なお，√pā「飲む」の使役相では，喉音転置（第 1 節の 3）が起こると考える必要はないことになる．

√dhā「置き定める」のように長母音で終わる語根と √pā「飲む」の使役相を比べると，長母音で終わる語根の使役相では，語根が含む長母音と，使役相をつくる接辞 -áya- のはじめの母音が連続してしまうことを防ぐために p を挿入するが，√pā「飲む」の使役相では，語根が含む長母音の後に延長要素 -i- (> y) が付いているために，母音連続を防ぐために p を挿入する必要がなくなっているということになる．これについて Jamison は，むしろ逆に p を挿入するのを防ぐために延長要素 -i- を用いている，と説明している[3].

3　p を含む語根の使役相

前述の Jamison の説明には，注 88 (p. 149) を参照せよとの注記がある．この注は，√pr̥ (√pr̥̄)「満たす」の使役相 pūrayati (AV+) に関する説明で，Jamison はこれが *prāyáyati にならないのはなぜか，という問いを立てている．これに対して W[arren] Cowgill が Jamison に，次のような内容を個人的に指摘したと述べられている（n. 88）．すなわち使役相をつくる際，語根末の母音と -áya- の最初の母音とが衝突するのを防ぐために一般に p が用いられるが，語根自体が p を含むときには，p . . . p という音の連続を

[3] Jamison, -*áya*-, 169.

避けるために用いられない．そのため別の方法を採ることになり，√pā「飲む」は pāyáyati に，√pyā「膨らむ」は pyāyáyati になる．すると √pr̥「満たす」は *prāyáyati という形になっていたかもしれない．以上のようなことを指摘したと述べられている．

Cowgill の指摘が正しいとすると，まず，√pā「飲む」は，たとえば過去分詞（過去受動分詞）pītá- などで延長要素 -i- を用いるので，それと同様に使役相でも延長要素 -i- を用いて pāyáyati とすることで p が連続するのを避けている，と言える．一方 √pr̥「満たす」は，一般に延長要素 -i- を用いることはないが，その代わりに零階梯の語根 pūr- を用いることによって p が連続するのを避けているということになる[4]．

零階梯の語根 pūr- を用いている，ということは次のように説明できる．まず，√pr̥「満たす」の印欧祖語での語根は *pleh₁- であり（*LIV* s.v.），過去分詞は一般に零階梯の語根に *-tó- を付けて作るので，√pr̥「満たす」の過去分詞は *pl̥h₁-tó- になる[5]．この *l̥h₁ のように「母音化した流音＋喉音」は，サンスクリット語ではふつう「ī ＋流音」になるが，鼻音があるときは「ū＋流音」になるので，*pl̥h₁-tó- はサンスクリット語では p*ūr*tá- になる．

このようにして形成された pūr- は，完全階梯の語根 *pleh₁- > prā- とは，同じ語根の階梯の異なる形態としてではなく，独立した別の語根と考えられるようになった[6]．すると pūr- は階梯の変化しない語根と見なされ，使役相をつくるときにそのまま -áya- を付けて pūr-áya-ti になった．一般に使役相をつくるときには語根が guṇa または vr̥ddhi になるので（*VGS* §168 [pp. 195–197]），零階梯の語根にそのまま -áya- が付くということは，それ

---

[4] Jamison, -*áya*-, 149; Leumann, ‚Stammbildung‘, 225.

[5] √pr̥「満たす」の過去分詞は pūrṇá- の方がふつうであるが，pūrtá- の用例もある．

[6] Whitney, *Roots*, s.vv.

が本来の形成法ではなく, 類推による形成法であることを示していることになる.

なお，使役相の語根に guṇa と vr̥ddhi の二種類があるのには Brugmann の法則が関係している．印欧祖語では使役相の語根は o 階梯になる．*o は，Brugmann の法則により，インド・イラン語派で開音節（その音節が母音で終わる）では ā に，閉音節（その音節が子音で終わる）では ă になる[7]．したがって，たとえば

*t*o*p-éi̯e-ti > t*ā*páyati「熱くする」,

*ĝ*o*nh₁-éi̯e-ti > j*a*n^{i}áyati「生む」（子音 *h₁ により閉音節になっている）,

のように，サンスクリット語では見かけ上，guṇa になるものと vr̥ddhi になるものとの二種類が生じることになる．松浦「yoṣan- と yoṣā-」93 でも説明されたように, やはりサンスクリット語の非常に複雑な語形変化を簡潔に説明するには，(1) 母音交替（とアクセントの交替），(2) Brugmann の法則，(3) 喉音理論，の三つのすべてあるいは任意の組み合わせを用いればよい，ということになる.

4　延長要素に関する参考文献

2016 年 9 月 17–18 日にウィーンで「印欧祖語の語根延長要素」に関するワークショップが行われ，その成果が雑誌 *Historische Sprachforschung*, 131 (2018) の後半に収められている．たとえば延長要素 -i- については Ackermann, '-*i*-Infix' で論じられており，印欧祖語で延長要素 -i- を含んでいたと考えられる 77 個の語根が分析されている[8].

---

[7] Gotō, *Morphology*, 128.

[8] 本ノートは 2023 年 12 月 11 日の梶原三恵子先生の「印度語学印度文学演習 IV」（東京大学文学部）での発表資料をほぼそのまま掲載したものである.

凡例

+	以降.
***A**	A は想定形.
B < C	B は C に由来.
D > E	D は E に変化.
***i̯**	印欧祖語の子音化した *i（サンスクリット語の y に対応）.
LIV	Rix (Hg.), *Lexikon der indogermanischen Verben*².
VGS	Macdonell, *A Vedic Grammar for Students*.

ヴェーダ文献の略号

AV Atharvaveda.

参考文献

Ackermann, K., ‘Root Variation vs. Root Extension – A Putative -*i*-Infix?’, *Historische Sprachforschung*, 131 (2018), 98–144.

Gotō, T., *Old Indo-Aryan Morphology and its Indo-Iranian Background* (Wien: Verlag der Österreichischen Akademie der Wissenschaften, 2013).

Jamison, S. W., *Function and Form in the -áya-Formations of the Rig Veda and Atharva Veda* (Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1983).

Leumann, M., ‚Zur Stammbildung der Verben im Indischen‘, *Indogermanische Forschungen*, 57 (1940), 205–238.

Macdonell, A. A., *A Vedic Grammar for Students* (Oxford: Clarendon Press, 1916).

Mayrhofer, M., *Die Fortsetzung der indogermanischen Laryngale im Indo-Iranischen* (Wien: Verlag der Österreichischen Akademie der Wissenschaften, 2005).

Rix, H. (Hg.), *Lexikon der indogermanischen Verben*² (Wiesbaden: Reichert, 2001).

Whitney, W. D., *The Roots, Verb-forms and Primary Derivatives of the Sansirkt Language* (Leipzig: Breitkopf & Härtel, 1885).

松浦高志「サンスクリット語文法ノート (8)：延長要素 -i- を含む語根に

ついて」，梶原三恵子（編）『インド語インド文学拾遺 2024』（東京大学文学部インド語インド文学研究室，2024），77–81.

松浦高志「サンスクリット語文法ノート (11)：yoṣan- と yoṣā-」，梶原三恵子（編）『インド語インド文学拾遺 2024』（東京大学文学部インド語インド文学研究室，2024），91–98.